

第1回 国立の民族共生公園（仮称）基本計画検討会 議事概要

■日時：平成27年11月24日（火）14：00～16：20

■場所：北海道自治労会館 第4会議室

■出席委員（五十音順、敬称略）

愛甲哲也、浅川昭一郎、内田祐一、加藤忠、坂井文、戸田安彦、野本正博、吉田恵介

■会議の概要

1. 検討会の設置について

国立の民族共生公園（仮称）の基本計画（案）のとりまとめという本検討会の設置の趣旨等について、事務局より説明がなされ、設置要綱が承認された。

2. 委員長、副委員長の選任について

設置要綱に基づき、委員の互選により委員長に浅川昭一郎委員が選任され、副委員長には委員長の指名により吉田恵介委員が選任された。

3. 議事

【基本計画策定について】

1) 民族共生公園で検討する施設構成

- 海外に胸を張れる空間であることが一番大事。
- アイヌ民族に対するリスペクトを体感できる施設を、どのように整備するかが課題となる。
- 100万人を博物館の中だけで受け入れることは不可能であり、来場者がある程度滞留できる多目的ホール、体験交流ホール等を設置する考えはあるか。
- 100万人の受け入れ体制が重要。駐車場があれば良いとか、アクセスがあるから良いというのではなく、受け入れ体制がなければその先は見えてこない。
- 年間来場者100万人の目標に対し、施設規模等の設定において柔軟性をもった計画が必要とされる。

2) 施設規模・内容・配置

- 継続的に来場者を誘致するために、印象的な施設・風景を出す様な箇所を最初から折り込んだランドスケープデザインや公園計画、施設計画が求められる。
- 博物館の位置がエントランスと一体的になっているので、ビジターセンター的な役割も博物館計画の中で考慮して頂きたい。
- アイヌの自然観を説明するには、川の流れ、森の存在、チセの場所、園路のルートなどを一望できる博物館など高い場所が適しており、博物館と公園との役割分担を考慮する必要がある。
- 博物館でのガイダンスの後、来場者は公園内を歩きながらアイヌの方々の暮らしの知恵や、現在の暮らしに役立つ情報を得ることで、アイヌ文化への理解をより深めることになる。
- アイヌの人達がアイヌ文化を発展するため、公開するために、既存施設にない全天候型の多目的ホールが必要である。
- 本物のチセと模擬的なものを混同すべきではない。本物のチセは景観としても、それを見てアイヌの人達の歴史や世界観を体験する事ができる。

- 体験工房やその他の体験施設に関しては、チセ風ではない新たなデザインが望まれる。
- ウツナイ川は重要な伝承活動の拠点になるため、川を跨いで駐車場や車寄せに整備することは避けられるべきと考えられる。
- ウツナイ川はアクセスの場所、博物館、広場、西側に広がる公園の要の場所にあるため、このウツナイ川をどう扱うのか、アイヌの世界観を踏まえつつ計画を策定する必要がある。
- 100万人を誘致するためには冬季間の利用率を高めることが必要であり、屋内で活動する施設、快適な移動経路などの確保が重要となる。
- 雪の時の対応策として、冬季でも快適な環境でアイヌ文化を体験できる場所が必要となる。
- 駐車場、エントランスと博物館との距離があるため、高齢者や身障者の方が博物館で乗り降りできる方策が必要とされる。
- 多くの来場者を一旦入れるホールみたいなものを博物館か、エントランス部分に何か設け、30分～1時間程度の短時間で帰る来場者にも対応し、また、滞在時間に余裕のある来場者に対し、公園内の水辺や川沿い、様々な体験ができるコースの設定など、滞在時間に併せたゾーン構成を考えると良い。
- アイヌの生活というのは自然との共生なので、自然エネルギーを活用した施設になると良い。
- 修学旅行や団体客の方々に対応できないと、別なところに行ってしまう。
- 体験交流施設としてどのような活動が予想されるのかをもう少し具体的に示していただくと分かりやすい。次回検討会でもう少し説明を頂きたい。
- 外国の飛行機の受け入れなど一生懸命にやっているのですが、外国人はまだ増えるはず。その事を踏まえると未来を見て、将来を見て、きちんとしたものでありたいと思っている。
- 公園周辺では、南側の民地との関係において乱雑な広告が設置されないように景観的な規制も含めて、周辺とのあり方についての検討が求められる。

以 上